

悔者得報

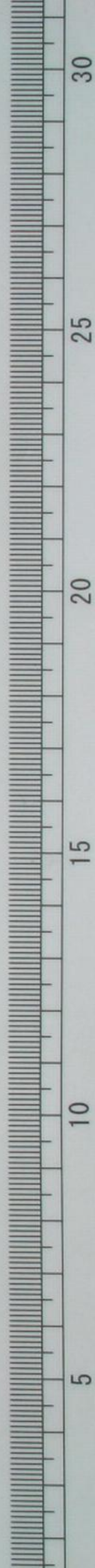
五

特別

14

1919

67



A ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the first column on the left being the widest. The page is otherwise blank.

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

38- 8894

○鞋錢

火災等の要請が甚しき要する中である。此の
 行の鞋錢の困りたるは、出資の金を出し、
 事うしんと、大隈任う、おあむ子、靴の
 此に要する、任の鞋錢を、うらうら、
 要する、おあむ子、靴の、
 之任の正存料、を一切、
 の名義を出した、
 うらうら、つた、
 七、八、九、十、
 七、八、九、十、

東洋製

終りしを知らず城を越えしに外より山崎の兵士
来るを言山崎が兵士又山城四境を十餘陣即ち
（山城守を）の出迎ふものありて日乗の山崎
（山城守）を獲るものありて（山城守）を
角袖を平して日乗の山城守を獲るものありて
驛を出迎ふ人の入るに（山城守）を獲るものありて
合ふれば四甲隊の山城守及び借印の二車ありて
の二車を北軍を以て交換せしむ

○この着

十二時より着せしは出迎ふ人停車場に交換す北
軍隊より又何れかの山城守を交換せしむ

東林堂製

故隊とてはあつた能く上田に比すれば轉に蘇
寒の或るはるは北軍を獲るものありて
戒むるも又あるは流るる或るは北軍を獲るものありて
しるるも又あるは北軍を獲るものありて
と圍後せしむるも又あるは北軍を獲るものありて
塔をなせるも又あるは北軍を獲るものありて
へ敵軍の警戒をなせるも又あるは北軍を獲るものありて
りき

○旅籠（高陽館）

高陽館に於ける旅籠も高陽館を以てえしるも今も高
陽に往來するも高陽館に於ける旅籠も高陽館を以てえしるも今も高

たるは侍の出立しと一坊の浄院を弼みたる侍
と属す杖をふるも、侍も侍杖の浄院を弼みたるが
世々々々の浄院を弼み上乗の推す、
いし侍を肩負ひ、自らさきかゝることをし、
なつら入るも、なつら入るも、
敷育念を布く、
この四かき、
物も、
出す、
職権を弼み、
あつたと、

東林堂

大乳院をほえたる

○釈迦(浄光寺)

さるの釈迦におぼゆる、
まゝ、
元、
を、
り、
係、
し、
配、
あ

招待會は豫記の如く致發の煙火を合圖として廿
 六日正午より開かる先づ鳴清館に於て國遊會を
 催し伯には國內を一巡して歡を共にせられ午後
 二時奏樂を合圖に會員一同行形亭に集まるや萩
 野左門氏開會の主旨を陳べ是に於て伯設けの演
 壇に登り凡る國の盛衰は偶然に起るものに非ず
 して皆必歸の結果に外ならずと説き起して日本
 外交史談に及び今日の文明は開國進取の國是を
 定められたるに基き此國是の定まれるは畢竟外
 交即ち外部の關係より來れりとして外交の最も國
 家の爲め重大なる事を論斷して夫より話頭一轉
 して近來の經濟に入り現下は既に病的狀態を過
 ぎ回復を待つ可きの時なり云々約一時間にて終
 り次に柏田本縣知事壇に登り氏の發聲にて一同
 天皇陛下萬歲大隈伯萬歲を三唱し機軸折詰酒
 を一同に頒ち各自行形、鶴清兩所に隨意團樂し
 て宴を開きたり、此間奏樂あり爆竹あり非常の
 盛況にて此日會するもの實に五百名の多き上
 りたりき

招待會

招待會は豫記の如く致發の煙火を合圖として廿
 六日正午より開かる先づ鳴清館に於て國遊會を
 催し伯には國內を一巡して歡を共にせられ午後
 二時奏樂を合圖に會員一同行形亭に集まるや萩
 野左門氏開會の主旨を陳べ是に於て伯設けの演
 壇に登り凡る國の盛衰は偶然に起るものに非ず
 して皆必歸の結果に外ならずと説き起して日本
 外交史談に及び今日の文明は開國進取の國是を
 定められたるに基き此國是の定まれるは畢竟外
 交即ち外部の關係より來れりとして外交の最も國
 家の爲め重大なる事を論斷して夫より話頭一轉
 して近來の經濟に入り現下は既に病的狀態を過
 ぎ回復を待つ可きの時なり云々約一時間にて終
 り次に柏田本縣知事壇に登り氏の發聲にて一同
 天皇陛下萬歲大隈伯萬歲を三唱し機軸折詰酒
 を一同に頒ち各自行形、鶴清兩所に隨意團樂し
 て宴を開きたり、此間奏樂あり爆竹あり非常の
 盛況にて此日會するもの實に五百名の多き上
 りたりき

として此れを、國法を清
 め事とするを
 任を招待するは北中西
 南を仰のみの方を自ら
 心して生きたるの勸誘
 をしてん又と未休を
 の方又一邊あり任の耳
 任を招待する人の心
 任を招待する人の心
 本任の夜多きを
 此れを招待する

東洋原製

た、現に伯に同行して来た新聞記者の一人も、僕と同じやうに感ずたと見えて、演説の中央に「伯は二時間餘の演説をなせり」といふ電報を打つたさうだ、處が、實際十五十分間はかりで仕舞ひとなつたので、僕等は些か意外の感があつた△そのみならず、何だかアノ演説は途中で止められたのではあるまいか、何か都合あつて結論まで進らずに仕舞はれたのではあるまいか、といふ考へも起つた、ソコで後で旅行の人々に此事を話すと、果せる哉ソレには理由がある△全体伯は元氣は充滿して居るけれど、悲しい事には肺が人並でない、常に醫師を伴つて旅行する程の肺格だから、どうかするぞ急に足に痠痛を起すといふやうな憂ひがある、此日も演説中に不圖ソノ徴候があるらしく感ぜられたから、若しソノ事があつては大變だといふので、急に演説を中止して壇を降りられたのださうな△コンナ事は此度に限らず、従来とても會まにはあ

つた事ださうだが、サウと聞てはいよいよ氣の毒の感に堪へぬと同時に、招待會の出席者としては些か遺憾の思なきにあらざる、しかし、此の遺憾は長岡と柏崎との演説で十分に補ふことが出来た。(つとむ)

いひかきやうしたとさういふもの
ひあ
要するに伯の演説は、
伯の演説もさうさうに、
さうさうと書大さうさうと書
いひかきやうしたとさういふもの
以上五月廿六日の記事
(尾)

東京製

●長岡に於ける大隈伯

◎大隈伯の長岡來着

大隈伯爵並に其の隨伴の一行は別項の如く昨廿七日沼垂登り二番列車に乗込み青木警部長及び各地より出迎へ又は新潟より見送の人々と同列車にて長岡に向ひ出發せしが是より先き長岡の歡迎會、長岡製油組合、長岡鐵業談話會等の代表者は三條まで渡邊北鐵專務は加茂驛まで執も出迎へ又た在岡の諸官衙吏員及近郡及市中の重立有志歡迎會員及び本社員凡ろ三百名(歡迎會及び本社にては孰も「歡迎大隈伯爵」の大旗を押し立て)は長岡驛ホーム内に於て待ち迎へしに列車は定時より十分餘後れ着驛せしが此時數發の煙火打上げあり伯は出迎者が整列して拍手を爲し万歳を叫ぶの間に下車してホームを出で設けの膳車にて歡迎會委員及び野本長岡警察署長等の案内にて隨伴の人々と共に即時旅館なる常陸樓に入りたり、此日は前日來の晴天にて殊に早岡停車場前及び旅館に至るの道筋には伯爵の風采を見んぞと參集したる人々は數限りもなく殆

ど入山を録きたりされば停車場前の如きは正午前より一時間程の間は全く往來も出來ざる程の雜沓なりき

◎伯の一行及び隨伴來岡者 左の人々なり

- (親戚)三枝守富 (侍史)大石熊吉 (醫)田原清助
- (家扶)久松信親 (家扶)入江俊太郎
- 波多野傳三郎 市島謙吉 (東京朝日)古我雅芳
- (報知)上島長久 (校友)増田義一 (校友)羽田曾澄
- 胡松 正見(富山縣憲政本黨代表者) (以上東京よりの隨伴)
- 五十嵐甚藏 坂口仁一郎 越智 修吉 島谷川相資
- 萩野 左門 野澤 卯一 齋藤 康造 石坂平八郎
- (以上新潟よりの見送者)
- 關 美太郎 植木龍太郎(以上高田よりの見送者)

◎鐵業會談 所に於る大隈伯の演説

大隈伯爵は既記の如く長岡鐵業會、長岡鐵業談話會、長岡製油組合の請ひにより昨日午後二時過旅館常盤樓より隨伴者と共に長岡鐵業會講所に至り小憩の後樓上に於て一場の演説をなしたり今其景況を記さん伯は内田三省氏の紹介により椅子を離れて卓に進み今と去ると二十四年前 聖駕に供奉して來越せし折當長岡は戊辰戰役の疲慮未だ癒はざる時とて其慘狀は今日想像も及ばざる程にて三嶋氏等は頽之れが恢復策

に奔走し居りし故及ふ丈けの力を添へんとを以てしたりしが僅か二十餘年を経たる今日再び來りて商工業の繁盛となりを見轉た感慨を溢るるを發達與つて力あり而して石油事業の發達は三嶋氏等の方に依ると少からずと信ず我亦へ伯と云ふ)日本の石油事業開發に就ては因縁淺からずとて伯が朝に在ると野に在るとを問はず之れが開發に意を用ゐるたるとを述べ斯くの如く石油業に對する功勞少からざれば斯業に關する功勞者に勳章を贈るの議あるに於ては我も小なき勳章位は請求しても可なりと諸語一番し更に我は石油に關する専門の智識を有せざるが故に未だ俄に斷言し難しと雖も外國の技師等の談によれば日本に於ける石油の存在地は決して越後の一小局部に限らず北は北海道より奥羽越後を經南信州より遠江に至る間到處石油瓦斯の發噴するあれば地下に包蔵する量決して尠少にあらずと果して然らんに國內の需用を充すのみならず進んで海外に輸出するに至るも遠きにあらざるべし而も支那朝鮮の如きに對しては充分他の

米露油等と競争し得べき便宜と有すと以て志あるものは益々事業の發達旺盛を計り内國は固より見込めらば支那朝鮮に至りて採掘を試むるも可なり然れども茲に戒むべきは徒に事業熱に浮かされ小資本小會社の分立するとなり此の如きものは決して成功するものにあらず假し此の如きものが一時の僥倖により存立するも遂には大資本者の併吞を免れざれば彼の一人に於て及ばざる事業も會社を組織して成功し更に組合となりツラストを造り以て強敵に對抗し得るの原理に鑑むべしと勸告し尙ほ終に臨んで事業は一己人の爲にのみするものは終りを全ふせず必ず己れの爲めたるも同時に國家の爲めたるものにあざれば眞の成功可期す可らず石油事業の如きは實に己人の爲め有利たるも同時に國家のため有利のものなれば益々發達を謀らんことを望むと陳べ是にて演説を終り殖業順平氏の謝詞あり全所に於ける聽衆は續業家と始め有志者等無慮二百名にして妙所には拍手喝采し堂も爲めに破ると許りなりき而して伯は殖業氏の謝詞終るや大隈伯爵萬歳の聲に送られ静々と堂を出で

榎原製

階下にて小憩夫より脚車にて眞澄亭に於ける歡迎會に赴けり時に午後三時二十分なりき

◎大隈伯爵歡迎會景況

大隈伯爵は去る十一年 御巡幸の節屢從して來越せし以來久方振りの來面なるが長岡及び近部の官衙吏員公吏名譽職吏員民間諸團體員等總ゆる方面に於ける重立百七十餘名發起となり豫定の如く昨日午後三時より眞澄亭に於て歡迎會を催したり、會場門前には大緑門を造り之に荒細、綿其他の農産物を以て「歡迎大隈伯」の五字を現はしたる匾額に大國旗を交叉し構内及園遊會場には各國々旗と紅燈籠とを飾りし樓上なる會場の周圍には紫帳を繞らす等の裝飾を施したり斯くて伯爵の一行車を接して會場に入るや爆發を爲し一行は少時休憩の後再び爆竹を發し此を合圖に會員一同樓上の會場に着席するや割曉たる奏樂(新編音樂隊の)の聲と共に伯爵の臨場あり是又於て發起人總代として代議士三輪潤太郎氏は開會の趣旨を述べ次に(此間奏樂)波多野傳三郎氏の紹介に依りて伯爵は壇に登り國の進歩

は總て外部の刺激による事を説て日本今日の文明が四十年前ベルリ波來に原因するを陳べ夫より租税問題に移りて税は總て生産力を傷けざるを本旨とせざる可らざる事より消費税を徵するの最も適法たる事總て地租増課の惡税たる事を説き尙ほ轉じて新陳代謝論となり萬物總て新陳代謝なくんば發達進歩なしと斷じ政治の腐敗も閥族占權の弊より來る事を喝破し凡る二時間近き大演説にてありたり

右終りて降壇するや正六位桐生吉英氏伯爵臨場の勞を謝し(此間奏樂)次に遊谷善作氏の發聲にて一同 天皇陛下の萬歳を三唱し奉り次に會員は大隈伯爵萬歳を三呼し奏樂と爆竹との合圖にて一同退席したり

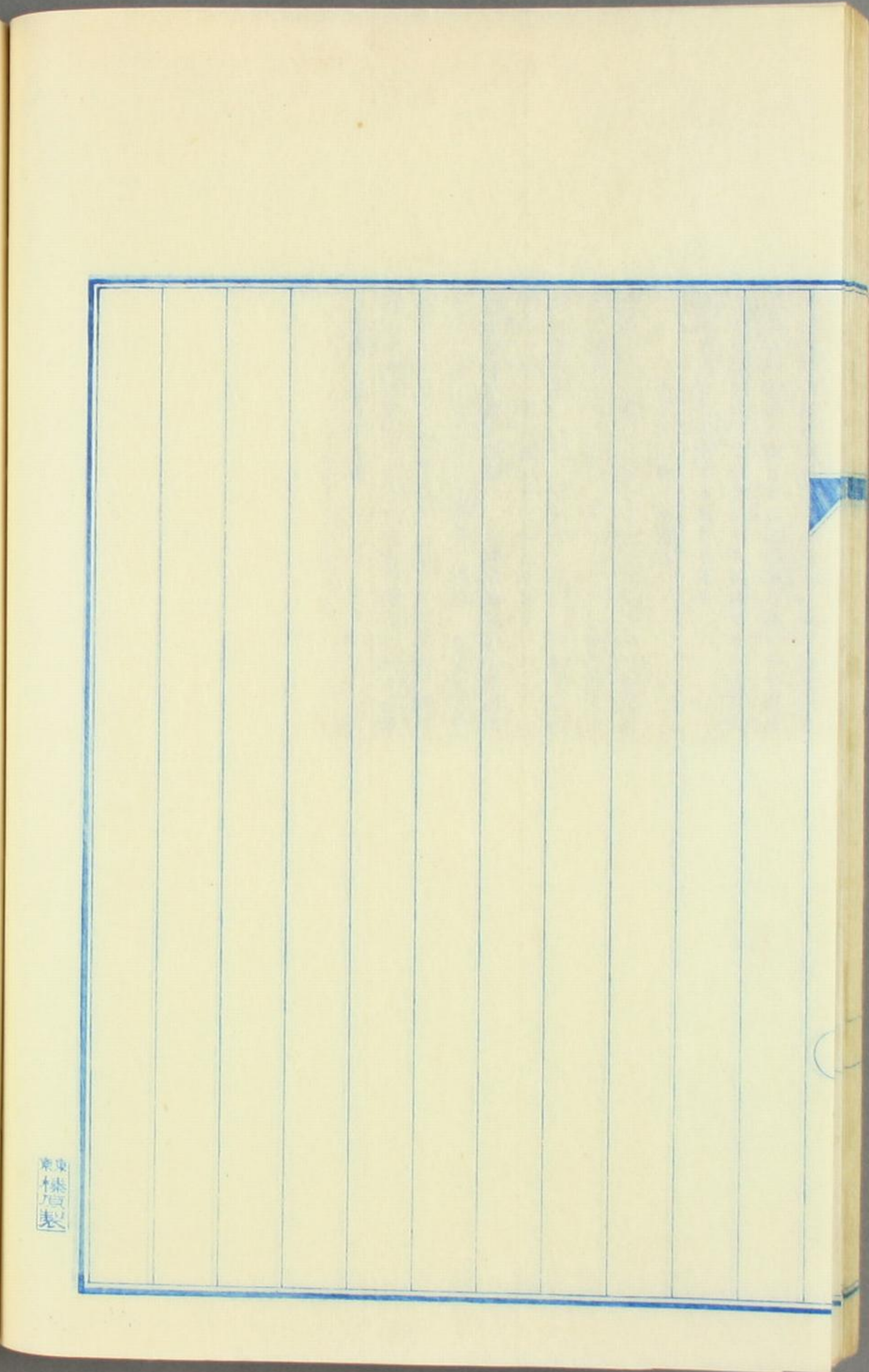
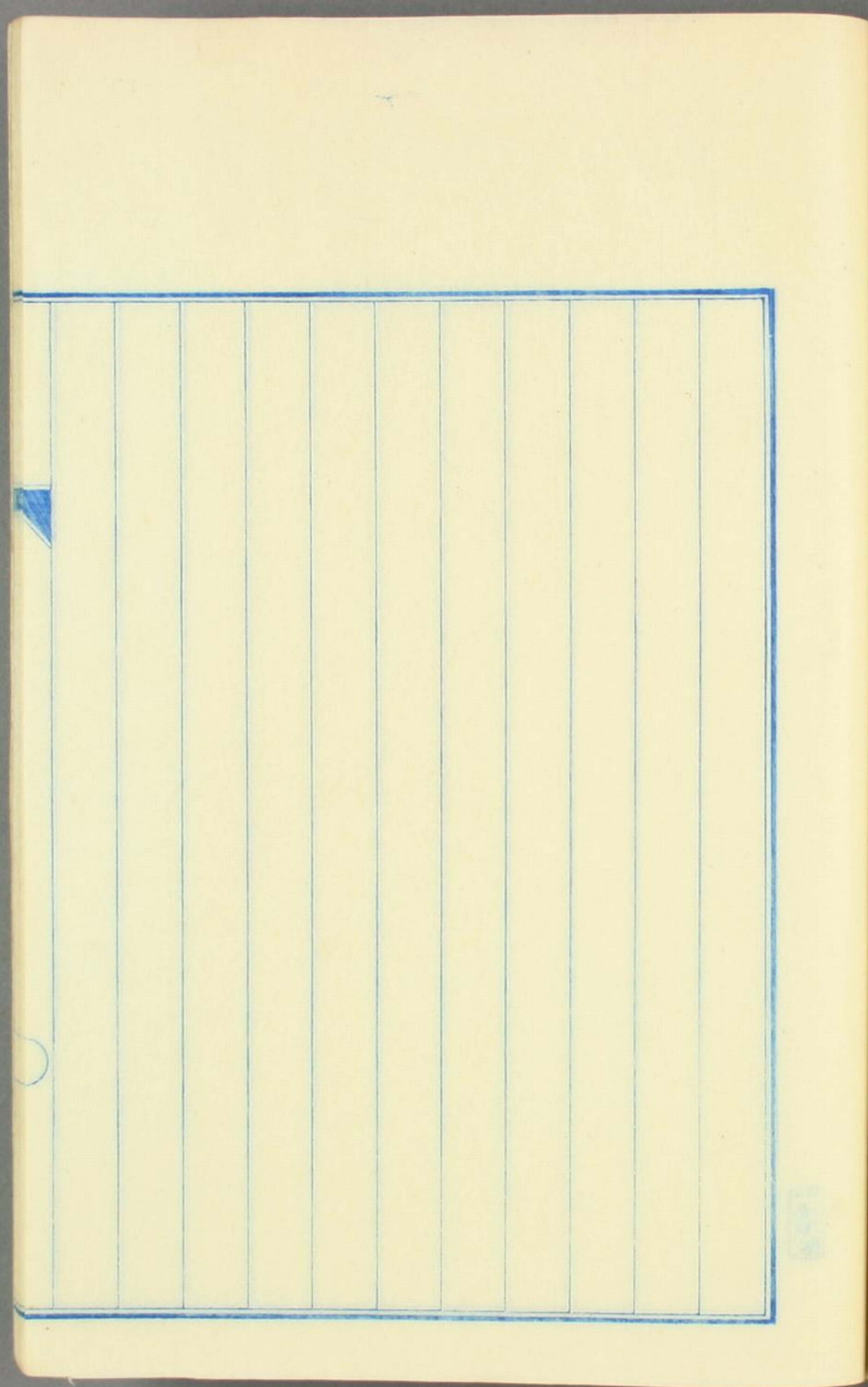
夫れより設けの園遊會場に出で折詰渡所、酒店、茶店等に就きて酒饌及び紀念の盃を受取り或は喫茶を爲し三々五々設けの休憩所に於て各々献酬をなし此間奏樂の餘興及び紅裙の舞あり最後は藝妓長岡甚句の踊りを爲し賓主孰も和氣満々の間に退散したるは午後六時過ぎなりしが當日の來會者は凡る七百名にして近年當地に於て曾て見ざるの大盛會なりき

◎石油家へ伯の懇話 大隈伯は昨夜旅館なる常盤樓へ當地の重なる石油業者數十名を招き石油事業に對しては合同して從事することの緊急なるに付懇話する所ありたり

◎伯の出發、柏崎行

大隈伯の一行は今廿八日午前九時十分長岡發上り二番列車にて出發し同十時三十二分柏崎に下車午後三時より西光寺に開く同地の歓迎會に臨まれ一泊し明日歸京せらるゝ筈なり

◎長岡警察署の警衛 大隈伯來岡に付長岡署にては伯の來往する道筋及び旅館、集會所等警衛のため枋尾、興板、新潟、高田、三條其他の警察署より應援を得て凡ろ六十名の警官を夫々配置し警衛を怠らざりき



頭腦

政治家中で未だの首相たるべきものは山本と木堂の評者なり。高島が出来ないと木堂又云ふ。神様には近

信越旅行記

△柏崎に於る伯の演説 柏崎西光寺に開きたる歡迎會は地方有力家の出席する約七百名、非常の盛會なり。開會に先だち大隈

伯の演説

伯の演説は大喝采を以て終了し内藤久寛氏の謝辭に引續き帝室の奉祝を終へ伯の健康

古社保存會の決定

古社保存會の決定 特別保護建造物指定國寶指定等の件に付會議中なりし古社寺

津浦線の海水浴

津浦線の海水浴 横須賀停車場より二十餘町を距る海邊、遠く房總の山々より

津浦線の海水浴

津浦線の海水浴 横須賀停車場より二十餘町を距る海邊、遠く房總の山々より

●信越陪行記 十五笠山生

▲長岡の盛況 濱車長岡に着すれば此處も亦た石油の都にして工場煙突林立し繁昌の有様躍々たり同志者數百名大隈伯を歓迎し三輪潤太郎、山田順一の兩代議士始め款野左門、阪口仁一郎、川上淳一郎、廣井一野澤宇一、松井郡治等の諸氏或は新潟より出迎へ或は長岡より新潟の校友會に參會せんと爲り伯と同行し伯の車は一層の繁昌を増せり長岡より進みて新潟方面に向ふ程地勢は愈々敞開して田畠一望際涯無く陸産の豊富なるを想像せしむ

▲沼垂驛に着す 北越會社の線路は直江津を基點として海岸に沿ひ柏崎に至りて右折し越後の中腹に向つて進行し來迎寺に於て信濃川を渡り中腹の各地を繞りて沼垂に着し之を終點とす以上は既成線なるが沼垂より信濃川を渡り返して新潟に出で其れより略ぼ海岸と併行して柏崎に歸るの線と別に新津より分岐して新發田を終點とする一線の新成線とを含めり左れば此行は既成線に依り新潟と殆んど併行して沼垂まで通り越し沼垂より新潟市へ歸り來る譯なり

▲沼垂に着す 沼垂の停車場に到りて各代議士を始め法官、書記官、參事官、縣會議員校友及び有志者數百名プラットフォームに整列し伯を迎へて万歳を叫ぶ伯は其歓迎を謝して車を降るゝや政友會の領袖たる江原素六氏中學校の用件を帯びて先に新潟に在り特に伯を迎へて敬意を表す伯は惘然一御同前に學校の用で歸らず御目に掛つた」と挨拶し其厚意を謝する斯くて伯はプラットフォームまで引き入れたる新調の腕車に乗り白衣を着けたる三人の僱強なる車夫之を曳きて停車場を出でたり場前の廣場は一体に人と車とを以て填充せられ警官の警衛亦た極めて嚴重なり

▲人車の大行列 信濃川を渡る 沼垂の停車場を離れて同所に入れば滿街の人は皆を築きて伯を迎へ行くこと七八町にして前面に一大長橋あり是れ信濃川の海に注がんとする所に架したる万代橋にして全長無慮九町と稱せらる右は渺茫たる日本海にして左には越山を割きて流れ來る信濃川を挾みて右岸は長汀曲浦直ちに田畠に連なり左岸に新潟市の人家流れに臨みて列なり風景極めて可なり而して伯の前列は既に橋を渡りて新潟市中に曲折し入れるに後及は尙沼垂の町中に在り以て其歡迎の盛んなるを知るべし ▲新潟の熱鬧 伯が新潟に到着されたるは

五月廿五日にして其前には東京及び東北十數縣を含める各中學校長の協議會ありて尙は閉會に至らず又た縣下の八縣立學校は聯合して大運動會を催はし當日は其運動開始の初日に當り縣下各地より學生の入り込むもの三千餘名の多きに及びたるに伯等の歡迎會あり政友會支部の評議員會もあり各種の事項合併して新潟に舉行するゝに至りしを以て北越第一の大都會たる新潟は更に一層の繁昌を増し瞥見する所世上不景氣の何れに在るやを知らざらしむ伯は此盛況を見つゝ新潟市を縦斷し豫定の旅館たる行形亭に着されたるは午後三時半なりし

●職業案内

- 一、匿名者の住所氏名其他問合の時郵便券四封入案内掛宛に問合さるべし普通端書御照會は一切取扱はず
- 一、郵券にて料金御送の時途中紛失の恐あり付三錢以上成可多額の切手(五錢一十錢十錢以上)も甘錢を望む
- 一、御申込後掲載中止の要あるも己納料金は一切還付せざる事
- 一、紙上匿名を要する件と雖掛宛は必住所氏名を通知し置くと然らざれば掲載せず本欄へ廣告爲さんとする向は其要點を略記(十九番三行)したる原稿に左記相當の料金(現金又は郵券)を添へ申込さるべし
- 番外 一件一圓物件の性質に不拘至急掲載を要する件
- 甲 求むる方 人事一件金廿錢土地家屋の買借一件金五十錢其他雜件人事一件金三十錢
- 乙 應ずる方 人事一件金五十錢土地家屋の賣貸一件金三十錢其他雜件人事一件金三十錢

●新定手形用紙(番外)

各地一手特約販賣を信用家に囑托したし充分の利益を與ふ(本郷區湯島六ノ十四山田商店又は京橋南八丁堀二ノ十二手形用紙專賣局)

●奉公人入用(九五八) 農家出身の男子數十名入用願ひ一切雇主持にて月給三圓以上七八圓迄(蠅壳一の三出世屋)

●得意廻り(九五九) 實業經驗忍耐強廿歳者卅五歳迄十名入用保證金十圓引受人要す月収十圓々五十圓望の人來談(麹町四の十一電話番町三二七京橋陶器商龍眠堂)

●有望(九六〇) 最大利益ある發明品販路擴張の爲市内各地方區域を定限し信用家に一手販賣を托す保證金不要尙志者直接午後來談照會拒絶(神田鎌倉町六中村商會)

●小使(九六一) 五十歳位體健にして身本確實なるもの至急入用給料面談(京橋尾張町二丁目天賞堂内小倉)

●求妻(九六二) 無係累の會社員歳三十一月収五十圓血統正教育普通容秀廿一歳に限り支度不論望人は寫真携へ來談(錦町某)

學生の監督

學生の風氣日に頹廢しつゝあるは最も顯著なる事實なり、遊蕩、賭博、姦淫、詐偽、凡そ人間の惡徳といふ惡徳は、學生社會に侵入して、其の肉を腐らし、其の骨を壞らすは止まらざらむとす、近ごろ府下某學校の一受験生が、船渠といへる問題に對して野鄙なるストライキ節を答案としたるを見ても、如何に學生の風紀頹廢したるかを想ふべし

地方行政の振肅

桂内閣に望むべきは、何を措ても先づ地方行政の振肅を以てせざる可からず、世間或は地方行政の紊亂を以て單に黨弊横流の結果に歸するものあれども、是れ一を知て二を知らざるものなり、或る地方の如きは市町村役場は殆ど政黨支部たるの觀を呈し、太甚しきは、公費を以て公然政黨擴張費に供する地方なきにあらざる、是れ正さしく黨弊横流の患害たるに相違なしと雖も、之れをして然らしめたるは地方行政の當局者其の正當の職權を履行せずして、反つて政黨の手先と爲れに由るれば桂内閣にして、嚴に地方行政官を戒飭して、其の職權を履行せしめ、之れを履行せざるものを處分するに於て毫も躊躇するなくむば、黨弊横流の如きは又何の憂ふる所ぞ

滿州開放は日本の冀望なるのみならず、又列國の冀望なり、勿謂露國も亦之れに反對

皇座陛下には今十八日午前十時三十分御出門遊園宮へ行啓あらせらるべき旨仰出されたり御遊園は左の如し
坂下門より櫻田門を出て外務省前通り左へ内幸町右へ新幸橋を渡り堀端より二葉町通り左へ善樂橋を渡り右へ堀端通り右へ汐先橋を渡り左へ濱離宮へ
▲東宮遊園 目下葉山御用邸に御滞留あらせらる、皇太子殿下には今十八日午前七時五十分同御用邸御出門遊園仰出されたり其御發着刻左の如し
六月十八日午前七時五十分 葉山御用邸御出門 同
同八時廿七分 返子停車場御發車 同
同八時三十分 新橋御發車遊園

遊説と勢範

政友會が機密費を利用して遊説を企てつゝあるは既報の如くなるが狡猾なる星は遊説の部署を定めて伊藤侯を東北々海道方面に追ひ遣り自身は西南方面に向ふことに爲したり有体に云へば伊侯の直參派は星を動かすを欲せざる譯なるが遊説費の引き足らざるより星の保有し居る分をも吐き出さしめんと魂膽より止むを得ず星をも動かさしむること、爲り従つて部署の相談に及びたる譯なるが之れより先き星は尾崎學堂を四國に遣りて土佐派と結託の密謀を企つるに至りたる事實に鑑み深く考ふる所あり元來關東、東北は星自身の勢範にて充分に之を開拓したりしが關西方面は常に土佐派の占領區域たる觀あるより伊藤侯を關東北に追ひ遣りて自身の田地に勞務する小作人たりしめ自身は新たに關西に向つて土佐派の領地を蠶食せんとの意向より右の如く部署を割り出したる次第なり然るに星の機敏なる關西方面にも疾くより親兵を扶植する所あり兵庫の西村淳藏の如きは星が袖裏の人物と爲り居りしが東北の菅原傳を介して愛媛の高須賀、香川の堀家虎造等を羅致し星の地盤は中國四國に廣まると共に九州に推し渡りて松田の勢範をも覗はんづる姿と爲りたり事情斯の如くなれば直參派及び土佐派は星の此計畫に對して裏を掻かん手段を工夫し居れるが故政友會の遊説部署は如何に變するも知るべからずとなり

伊侯の遊説難

政友會遊説計畫の裡面に勢範争ひの伏在すること別項の如きと共に伊藤侯に對する眞の直參派は侯の遊説を不可と爲し之を諫止するものあり并ば政友内閣破壊の始末に對する言譯遊説を爲すも格別の効無きのみならず黨勢擴張の爲めには差當り文官任用令改正の如きは地方の人氣取りに公言せざるべからず其他少しにても具體的問題に論及するとせば言質を納るゝこと、爲り將來の運動に妨害あるとも利益無しとの意

分限

令を据に飽まで嘔り付けた。午前十時旅館に於て専門學校々友と共に寫來伊...

信越陪行記

十六笠山生

△昨申歓迎の二字願はる。新潟に於る専門學校々友會は稀有の盛況なりしかば伯は殊...

静岡税政の影響

(第三十五銀行の危機)

静岡の縣言が政友會派と結び付きて有らん限りの税政を行ひたる結果は散々に同地方...

△砂山を越ゆ。廿六日新潟に於る伯の日程は午前八時新潟市背面の海岸砂山に催ふさ...



佐倉義民傳 六十三

桃川 實 演
速記法研究会 員速記

爰で宗五郎始め六人の者は支度を致しまして、顔の知れないやうに頭巾などを被り、別れになりまして大手へ参り、大老酒井雅樂頭忠清公の御下城を今か〜と相待つて居りました、其頃は酒井公の御勢、どいつたら實に大したもの、宛で飛鳥を落すやう、將軍家綱公は何事も雅樂頭に御任せ遊ばして、忠清が何か申上げますと「宜きにせよ、さうせよ」と云ふ御沙汰があつた、何でも雅樂頭の願ひ通り御採用になりまして、下々の者は此將軍家の事を「宜き將軍、さうせよ公」など、諷名を致しましたる位、大層酒井様を御信じて遊ばした、雅樂頭殿は上州前橋にて七万石でございませう、官は從四位の少將であらした、日々の御登城、天下の政治に心を盡して御出なさる、されば其御大老の御下城を相待つて居ります七人の名主方に於きまして、今か〜と首を延して居ります位、其内に御太鼓様の方に當りましてドーン〜と打出したのが八時の御太鼓、只今の御役所は八時に初つて四時に引けするが、昔は登城りするものが四時三分で御下城になりますのが八時三分でございませう、丁度今の時間で云ふと御下城は三時少々過ぎ位な所でございませう、御櫓に於て御太鼓を打出しますと間もなく「ハイヨウ〜」と云ふ聲、是は「控へ居ら〜」と言ふのが、さうもハイヨウ〜と聞へるので、其内に大手の方へ對して金紋劔酢醬草の紋付たる御先箱、二本道具でございまして、大老酒井忠清公御下城に相成ります、尤も御駕籠に於ては利足と申しまして、御六尺が足を揃へてバタ〜と恰も駈けるやうにして御下りになります、是は平素の慣し方でございませう、何か天下に事のあつた時に、俄かに早足の登城早足の下城などを致しますと、下々の者が驚いて騒ぎますから、平素からして早足の登城をして居りましたものと見へる、御下城も其通りでございませう、今雅樂頭殿御同勢が御下りに相成りますと「ハイヨウ〜」と云ふ聲、喧しく個所個所に於ては下座制止の聲を掛けます、宗五郎始め一同此様子を見て居たが、ハ、ア倍は酒井様御下城になつたかと言ふが、中にも宗五郎、被つて居たる頭巾を掻き棄て、バツ〜と御駕籠へ駈来り、一忍乍ら御願にございませう、御取上を願ひ奉ります、恐乍ら御願の者にございませう……」

例の願書を持つて御駕籠へ籠らんと致し、すると御駕籠の武士「下れ〜」と下りを、願があれは願を以て願へ、逆の願は御取上にはならぬわ、エ、下り居ら〜」言ひつゝ、宗五郎の肩の所へ手を掛けてドーンと押戻した、ガツッ夫れへ倒れたが又起上つて木内宗五郎「恐乍ら下總國印幡郡佐倉印東印西二百二十九個村三万六千七百三十六人の者、今日渴命に及びます大事、御取上を願ひます、御願の者にございませう、御取上を願ひ奉ります……」と「退れ〜控へ居ら〜」と又もや宗五郎二三度夫れへ突刺されたが、少しも屈せず起上つては一生懸命願ひに及ぶ、夫れを遠く離れて見て居りました千葉村の忠藏小原村の半十郎下勝田村の十右衛門瀧澤村の六郎兵衛瀧野村の伊兵衛高野村の三郎兵衛の六人は手に汗を握つて見て居りました、正かに側へ出る譯にはなりませぬから只遠くから見て氣を悶んで居りますだけ、其内に宗五郎一際聲を張上げて「一忍乍ら三万有餘人の者今日必死に迫りますの大事、御取上を願ひ奉ります」と申上げた聲が御乗物の内へ達したものと見へて、雅樂頭様の御聲として「取上げて遣はせ」と云ふの仰せ、夫れを聞くに御駕籠の武士ズカ〜と夫れへ来て宗五郎の袖を確乎押へまして「士、神妙に致せ、御取上に相成つた〜」と云ふ、有難さ仕合せに存じ奉ります……」と言ふ所へ大勢の仲間が駈けて参りまして忽ちの間宗五郎を引つ擔いで下馬先の酒井雅樂頭様御屋敷へ連れて参りました

かつけ
根切
林軍醫總監 方
三十五銭 七十五銭
順天堂合資會社

有効はふか
松本常之丈
香象高島嘉右衛門先生門人
易學教授
吉岡判所
淺草公園前山下馬道町三ノ八

横濱災後復興會社東京店
電話(特)二三四〇番(二一六〇番)
四谷支部 電話番馬町二丁目
淺草支部 電話番馬町四丁目
飯倉支部 電話番馬町一六五八

千早曙兩艦
紙
魚類
安房
房用砂
上總材

一世

の人家味方にして... 追憶談... 克堂曰く星は個人的愛嬌家... 悪赤顔の悪人... 評するは兒玉陸相△井上 伯云△星も剛情な男であつたが惜しいことをした一体日本人には剛情な男に逢ふと直に之を倒したがる

信越陪行記

△長岡鐵業會に於る伯の演説... 大隈伯は長岡の歡迎會に臨むに先だち同地鐵業家の團體たる鐵業會議所に臨むる來會者二百餘名にして伯は發起人に紹介せられたる後余は廿餘年前車駕に陪して當地を通過せるときは成辰戦後の回復全からず實に慘憺の狀を呈したりしが當藩の奇傑河井氏の後を受けて長岡の回復に勉めたる三島氏が専ら開墾養蠶等の經營を以て徐々に産業を起さんとせらるゝの時なりしが

山梨縣ベスト發生彙報

去る二十日山梨縣北巨摩郡甲村二百四十七番戸五味川雄(ハ)なるもの眞正ベストに罹りたるを以て其筋にては是非共其病毒を局部に撲滅せんとて熱心に検査豫防をなし居り其模様を掲げむ

山梨縣ベスト發生彙報

△患者の豫後 患者は直に避病舎に收容したるが豫後は佳良なれども未だ發病の原因を確め得ざるを以て今尚は調査中なるが同患者は年七十八歳の農夫にして六月十二三日の頃右足趾尖に小創を受けしも異狀を呈することなかりしに、二十日の日突然全身違和感寒戰を發せしなりと

五畿内(山城)西
物産(山城)陣
清水焼
栗田焼

佐倉義民傳

六十九
速記法研究会 實講演

「左様、先づ夫死でござりまする」
 「其方に似合はぬではないか、同じ命を棄てるならば領分一同の者を助け、潔く御處刑になる事を心掛けぬ、なせ願うべき所へ願はぬ」
 「はい……同の事ですが、願うべき所と申しますは何でござりまするか」
 「當月二十日の終の御成を待つて、山内御靈屋の内にて將軍家の御袖へ絶り直訴致して領分一同の者を助け遣はせ」
 「はい、忍入りました事乍ら土民宗五郎、中々御靈屋へ忍びます事なと思ひも依りませぬ」
 「イヤ、元より其方が幾ら御靈屋へ忍ぼうとしても、其方一人の力では到底出来ぬ事ぢや、忍ぶ手引は此圓壽が致して遣はす、と申すと出過ぎと思ふであらうが、實は拙僧も下總佐倉の生れ、父は甚右衛門と申して矢張り名主を勤めて居つた、先代加賀守正盛殿が印幡沼新田開拓を思立つた其砌り、父の甚右衛門なる者は先祖より傳はる書類を以て御意見を申上げたる所、加賀守の怒りに觸れ、丁度印幡沼の邊りに於て御手討と相成つた、家財は欠所になり妻子は追放、欠所金は残らず不淨藏へ收め、印幡沼新田開拓の用に供された、夫れ故郷田家には怨みはあると思はなき此圓壽、實に今日領分百姓共の困難を聞くに付け、うかして之を助けてやりたいと思つて居る、依つて直訴の手引は拙僧が致して遣はす」
 「はい、夫れは誠に難有き事に存じます、手前は元より總代の事、逆磔刑に相成りましても聊か御怨みとは存じませぬ、只領分一同の者を助け一日たりとも安堵の思をさせたく存じます、して二十日の終の御成の節は何う云ふ事に致しませう」
 「イヤ、其日に至つて忍ぼうとしても中々御靈屋の内へ近寄る事も出来はせぬ、依つて十九日の夜に拙僧が案内を致すから御靈屋へ忍び廿日の御成を相待つやう致せ」
 「はい……」
 「付ては其方と共に此江戸表へ罷越したる者は何者だ」
 「エ、名主共六人でござります」
 「夫れは如何致した」
 「石町三丁目下總屋武右衛門と申します荒物間屋、尤も國者でござりますが、此者の中二階を借受けまして忍び居ります」
 「左様か、夜明次第に書面を認め其六人の者を呼寄せ、せうせ其方は早ければ平内、後れても明年早々御處刑は通れぬ身ぢや、して見れば防々の事を其六人の者へ依頼をして心残りのないやうに致して置くが宜い、又圓壽の身の上話、万端の手配は寛々話を致すであら

う、サア、圓壽の部屋へ參れ、茶なりど入れて語り明そう」
 「恐入りました、然らば御言葉に従ひます」と夫れから圓壽殿の部屋へ參りまして夜明けまでの物語、宗五郎大いに力を得ました、楮夜が明けますと書面を認めて例の六人の者を呼びにやりました、御話駭れて忠藏始め六人の名主共は、總代の宗五郎が酒井様の御駕籠へ纏つて夫れが御取上になつた様子を見ると直に下總屋武右衛門方へ取つて返し今に何とか御沙汰があるだらうと夫れのみ首を延して相待つて居りました、所が三日経つても五日経つても何の沙汰もござりませぬ、ア六人乍ら鬱いで仕舞つた、小原村の半十郎が「忠藏さん、是はア何うしたでございませうな、旦那さんから何とか沙汰がわりそうなものだか……」
 「さうさ、一日願が上つて見ると俺共は呼出される約束なんだけれども少ツとも其様な氣振もないのは、さうも可憐いな、六郎兵衛さん何うだ」
 「先づ俺の考では酒井様の御屋敷で旦那さんは首でも斬られましたかな」
 「成程一旦願を取上げて置いて、面倒だと云ふので百でもチョン斬つたかな」

後 肺病 肺炎 肺膜 肺病 肺炎 肺膜 肺病 肺炎 肺膜

小兒診療 午後診 電話新橋 赤坂區青山北町 四丁目百一番地 秋山七朗

アツキス



BATTLE MAX

原料

(和泉) 様
通
(攝津) 酒丹伊

信越陪行記 (廿五) 笠山

△足ある大隈伯 柏崎の歓迎 會了りて内藤久寛、三輪潤太郎、山田順一の諸氏東道主人となり市島謙吉、波多野傳三郎、大石熊吉の諸氏と一旗亭に小宴を開く秋野左門氏連れて至る空席只床の間の前あるのみ秋野氏霜髪且つ体軀魁偉、床を後ろにし安座して酌む暫くして酌人三五名来る三輪氏直ちに「大隈さんへ御酌をしる」と命じ秋野氏微笑して杯を重ね献酬數回、秋野氏起つて便所に赴く酌人驚いて「大隈さんに足がある」と叫ぶ

△高野聖と奈良法師 朝日の古我雅芳氏圓顔に五分刈の髪を戴き沈黙にして時々警句を吐き顔る神味を帯ぶ新潟長岡の間大隈伯と食物を談じ酒を好まざるを説く伯其戒律の趣味あるを目し一行中最も精進なるものと爲す柏崎に泊するの夜余先づ伯に候す古我氏の風采を評し「高野聖は」と問はる伯も無く古我子至り余が長岡の停車場に靴を置き忘れたる失策談を語る伯「奈良法師は晝夜兼行だから」と評しつゝ「高野聖は今日の歓迎 會場に見えなんだがドウかしたか」と問ひ「大分眼中が赤いのは怪しい」と問ひ「問ひも急なり要始めはドウも越後は睡い國です」杯受け流せしが道に支ふる能はず伯の舌鋒は一轉して奈良法師に及び兩人這々の体にて別室に避く

△柏崎發程 伯は廿九日午前七時三十五分

柏崎發列車にて歸京の途に就かれ一行は午前七時旅館を發す同志者數百名車を列ねて伯を見送り停車場前の畝中にて煙花を打ち揚ぐる事昨日の如し斯くて伯は万歳の祝聲に送られ三輪、山田、渡邊其他の同志及び川上、廣井等の校友諸氏と同車して柏崎を發す直江津に至りて長岡柏崎方面の諸氏伯に辭して分れ高田方面よりは室孝次郎、太田彌次右衛門諸氏外數名、直江津に出迎入道車進みて高田驛に至れば同志數十名停車場に待ち受けて伯に敬意を表す觀車は順路關山に至りて是より長野縣界なり青木警部長は保安課長を代理として長野迄伯を送ることゝし此にて伯に辭す此行青木警部長の盡力は一行の感謝する所にして伯も亦た深謝せらる室孝次郎氏始め高田の諸氏亦た此驛にて分れを告ぐ之より先き波野氏は所用ありて直江津より長岡に引つ返したれば一行は俄かに其數を減じ伯は寛がるを得たるも「多人數の方が面白い」とて平民旅行の本色を發揮せらる

△上田有志の敬意 汽車長野に入れば新潟縣警察保安課長及び護衛の警官は此にて伯に辭し長野市長、長野警察署長及び小池平一郎氏待ち受けて伯に禮す上田より有志者五名伯を長野迄出迎へ前日の來遊を謝し同車して長野を發す上田に至れば樂隊の奏樂と煙花とを以て伯の行を送るの外同志者二百餘名停車場に在りて伯の万歳を祝し同志數名輕井澤迄伯を見送る其禮意を用ひたりと謂ふべし

川行 (七)

日鐵常磐線の一帯は殆んど太平洋に面したる風光絶佳の地なるも、開通日向淺く未だ世に紹介せられざる遺珠たる處に多きが日鐵會社は今回此等紹介の任を托せんとして吾々同業記者十五名を其特別車に搭乗せしめ上野勿來閣名勝案内の勞を取るとなれり其用意 久保運檢課長病餘疲勞未だ癒へざるに拘らず自ら東道の主人となり、櫻井

佐倉義民傳 七十四

「其後酒井様の思召しで、私は當上野山内へ預けられた。先れで私は無事で居りますやうなもの、併し斯うして居りましたは皆開始御領分一同印東印西の人々へ響して相済みませぬから、實は昨晩含み狀の用意を致しまして、今朝は御領主様の表御門前で切腹致そうと覚悟を致したのでございます。」とウーム、どうも其様な無氣な事をして下さいますよ、今爰で旦那殿に万一の事がありますと、俺共は盲人が杖に離れたやうなものでございませぬ、夫れでも能くア思止つて下さつた……」と「イエ私か斷念つたよ云々次第ではございませぬ、外の寺では納所、上野では御院代御手代りと申します御書と云々御方が幸ひ夫れへ御出になつて私への御意見、夫れで一時私も白書を断念しました、其譯と云ふのは、皆さ聞かして下さい、今堀田原の御上屋敷御門前で腹を切つた所が御願は上がりませぬ、昔は、犬死、同じ命を棄てるならば當月の二十日の終御成、將軍様が上野御靈屋へ御出なさる其時に、御靈屋の内へ直訴をして之を表向きにして一同の者を助けて遣はして、斯うく御處刑を受けると、其圖畫と云ふ御方に申されました。」と「へい、して見ますと公方様へ願ひをするので……」と「如

を頼り仰るのでございませぬか、エ、承知致しました、是だけの大事を一人で引受けて願ひ上げて下さる旦那様、若し御處刑にでもなりました後は、産神様より大切に致します、小供衆や御新造御老母の所は何うでも致しますから、何分宜しく御願申します、俺共が出て可い事ならば共に願ひを上げたら存じます、さう云ふ譯にもならず……」と「イエ今御話申す通りの次第、私一人が忍ぶのさへ能く在事ではございませぬから、貴下方へは其土から又御託を致しまする、言ひつゝ、宗五郎包物を開いて取出しましたのが、帯でございませぬの或は矢立煙草入なせ、云々やうな難品七品

廣告

驚くべき日本の大發明
複方克快丸は
其効克快丸に三倍す
大醫陸軍々醫總監
林紀大先生發明
御傳方にして
かつけリウマチス 根切
五年十年の長病も
貳劑服せば全快す



かつけ病者數萬人
實験の結果轉地せず
毒たてせ全快しむ
故に半劑二日分服し
大効服なれば服すべし
貳劑壹圓五拾錢壹劑七拾五錢半劑卅五錢
警視廳獻納 明治廿七年八月
びつくり目薬 小瓶拾錢 中瓶廿錢
一切の眼病に、し俗に雲切目ぐすり
淺草並木町 順天堂會社
六區高麗橋 順天堂會社
大木會社 山帝國會社
安川商店 森十全堂
玉置會社 寶丹
小連綿會社 佐々木
大木口哲 資生堂
北海道北見國枝幸港 巽杏林堂

流行夏帽子其他夏物類輸入候間
正札にて安賣仕候御意
三日以内外品代金何れ共引換候
神田區龜治 松屋萬七
町十一番地 電話本局 二百六十一

以下全て
白紙

明倫彙編
下流

十卷